

オンラインファンコミュニティの研究
——中国の日本アニメ字幕組を事例として——

京都工芸繊維大学大学院 程 遥

1 目的

この報告の目的は、特定な外国（映像）コンテンツのコアな愛好者によって構成されるアマチュア翻訳制作グループであるファンサブタイトルグループ（fansub と略す）を対象に、彼らの実践をめぐる周辺のファン活動の実態を把握する上で、こうした一連のファンネットワークに基づくファン活動をコミュニティの視点から連続的に捉えることを試みる。事例として取り上げるのは中国における日本アニメのファンサブグループ（中国語表記は「字幕組」）である。ファンサブが行うコンテンツのシェアリング活動に関して著作権問題を抱えるため、現代メディア環境において「逸脱者」としてとらわれており、また、そうした状況を踏まえ、ファンの創作意欲と現存する産業構造の矛盾を切口に、ファンサブの逸脱が将来的に社会への還元の可能性を持つということを示唆した Leonard(2004)、Condry(2010)、伊藤（2014）などの先行研究があげられる。しかし、産業構造との関係の中においてのみファンの生産性を捉えることで、今日ますますグローバル化が加速するコンテンツの流通においてファンシェアリング活動の存在意義を十分に釈明できない。本報告において、字幕付きアニメを能動的に視聴する者を含めて一連の活動の一端を明らかにすることで、ファンサブ活動がいわゆるアニメオタクの全体における位置づけを考察する。

2 方法

①2013 年に行われたオンラインエスノグラフィック調査②中国の字幕組の責任者 2 名及び字幕組アニメを長年に視聴する者 4 名を対象に実施した非構造化インタビュー（インタビュー調査詳細は報告にて）を主なデータとして分析を行った。

3 結果

分析の結果、字幕組のようなファンシェアリング活動グループは公式的な供給に満足できないファンたちによって発足したが、こうした活動を通してファンネットワークが形成されていた。その結果、中国のアニメオタクの関心はコンテンツの視聴より、多様なファンコミュニティの構築という次の段階へと移行した。

4 結論

以上から、字幕組アニメを視聴することは、単純に翻訳されたコンテンツの受容ではなくなり、直接的に字幕組アニメの翻訳制作に関わらない者たちを含めてこの一連の過程を連続的に捉える必要があると考えられる。

文献

Condry I., 2010, Dark Energy: what fansubs reveal about the copyright wars, Mechademia (5): Fanthropologies, University of Minnesota Press.

Hine C., 2000, Virtual ethnography, Sage Publication.

Leonard. S., 2004, Progress against the Law: Fan Distribution, Copyright, and the Explosive Growth of Japanese Animation, MIT(online) (<http://web.mit.edu/seantek/www/papers/>)

伊藤瑞子, 2014, 「制作者 VS 消費者のあくなきせめぎ合いーファンサブ文化にみる「ハイブリッドモデル」」, 『オタク的想像力のリミット』, 筑摩書房